

アルタイ諸語対照研究(3)

城生 佰 太 郎

はじめに

小稿は、城生佰太郎(1999-a)，同(1999-b)に続く連載形式をとる研究ノート
の3回目である。本稿との関連を明らかにするために、以下に前回までの目
次を掲げておく。

1. アルタイ諸語概説

1.1. 定義と呼称

1.2. 文献資料

1.2.1. モンゴル語

- (1) 契丹文字文献
- (2) 蒙古文字文献
- (3) パスバ字文献
- (4) アラビア字文献
- (5) 漢字文献
- (6) トド文字文献
- (7) ソヨンボ文字文献
- (8) 満州文字文献

1.2.2. トルコ語

- (1) ルーン文字文献
- (2) アラビア文字文献
- (3) ローマ字文献
- (4) その他

1.2.3. 満州(トゥングース)語

- (1) 満州文字文献
- (2) 漢字文献

1.3. 方言

1.3.1. モンゴル語

1.3.2. トルコ語

1.3.3. 満州・トゥングース語

従って、これに続く今回はアルタイ諸語概説の第4節にあたる「1.4 系統と
類型」から始まる。ただし、筆者は今日のレベルにおける系統論に対しては満
足な答えを期待しにくいと考える。それゆえ、系統に関しては単に従来の見解
を、(1)ウラル＝アルタイ語族説、(2)アルタイ語族説、(3)アンチ・アルタイ語族

説、の3類に分けて概説するのみに留め、主眼を後半の類型論的観点からの概観に置くこととする。

1.4. 系統と類型

1.4.1. 系統論

1.4.1.1. ウラル＝アルタイ語族説

アルタイ諸語と他の言語との関係が論じられるようになったのは、18世紀の前半になってからのことであり、その火付け役となったのはスウェーデンの Johann von Strahlenberg であったといわれている。彼は、ポルタバの戦いに軍人として参戦し、ロシア軍の捕虜となって東部ロシアに数年間の長きにわたって身柄を拘束された。この間、フィノ・ウグール諸語、トルコ語、モンゴル語などをはじめとして満州・トゥングース諸語など多くの未知言語と接したことにより、これらの諸言語に興味を持った。この結果、世界で最初にカルムック語辞典の編纂という偉業を達成することとなった。

しかし、彼が後世に与えた最大の影響は、内容の真偽は別にして、何と言っても von Strahlenberg (1730) であろう。この中では、「タタール諸語」という命名のもとで、(1)ウイグール、彼の言う「フィノ・ウグール」、およびフィン、(2)トルコ・タタール、(3)サモイェード、(4)モンゴル・満州、(5)トゥングース、(6)黒海とカスピ海の沿岸地帯に住む民族、の6グループの言語が分類されている。

この指摘が、かろうじて学問的なレベルに到達するのはおよそ100年後のこととなる。かの有名なデンマークの歴史言語学者 Rasmus Rask は、Rask (1834) において「タタール諸語」を改め「スキタイ諸語」とし、新にグリーンランド、北米、北アジア、北欧、コーカサスおよびバスク語など非印欧系の諸語をもこれに含めたので、結局のところ極北アジア諸語、コーカサスおよびヨーロッパにおける非印欧系諸語の大半がこの「スキタイ諸語」として1グループをなすこととなった。

19世紀の中葉を過ぎると、印欧諸語において比較言語学が開化した結果、アルタイ諸語にも当然のことながらその光がさし始めた。フィンランドの A. M. Castrén は、語族の概念をはじめアルタイ諸語に適用したことで知られるが今日でいうウラル諸語とアルタイ諸語が互いに同一の祖語に遡ると考え、両言語発祥の地をアルタイ山脈とサヤン山脈のあたりと推定した。これが世に言う「ウラル＝アルタイ語系統説」だが、彼自身はそれを「アルタイ諸語」

と呼んでいたなのでこの点には注意を要する。

Castrén (1856) には、これら初期の研究成果がまとめられているが、彼の所説を簡単に述べれば、

- (1) サモイェードは、フィン語とトルコ語の中間に位置する
- (2) フィン語とトゥングース語は、サモイェードを介して親族関係を確立することができる
- (3) 満州、トゥングース、モンゴルは極めて近い関係にある

となる。従って、結論的にはサモイェード、フィン、トルコ、モンゴル、トゥングースはすべて同系の言語であると考えていたことになる。

続いて、ドイツの W. Schott は形態論的対応だけでなく単語レベルでの対応をも視野に入れ、本格的な比較言語学的手法を用いた結果、いわゆるフィノ・ウグール諸語を「チュード」、トルコ、モンゴル、満州・トゥングースを「タタール」と呼び、この2つを併合して「アルタイ諸語」または「チュード・タタール諸語」と呼んだ。また、チュワツシ語をトルコ諸語の中に位置づけたということは、後世のアルタイ比較言語学にとって大きな功績であった。なお、彼の所説は Schott (1849), 同 (1853), 同 (1860) などに述べられている。

一方、エストニアの F. J. Wiedemann は、Wiedemann (1838) においてウラル＝アルタイ語族に関する特徴を14か条にまとめている。

- (1) 母音調和がある
- (2) 文法性がない
- (3) 冠詞がない
- (4) 語形変化は接辞による
- (5) 名詞に人称接辞(所有接辞)が後置される
- (6) 接辞による動詞の派生が多い
- (7) 前置詞を用いず、後置詞を用いる
- (8) 修飾語が被修飾語の前に立つ
- (9) 数詞の後には複数形を用いない
- (10) 形容詞の比較級には奪格を用いる
- (11) 「持つ」という概念には与格を用いて「～に…がある」と表現する
- (12) 否定には特別な「否定動詞」がある

- (13) 疑問文には疑問詞を後置する
- (14) 原則として接続詞がなく、動詞によって代用される

上の指摘を概観すると、音韻に関する項目はわずかに(1)のみに留まり、残るすべてが形態論および統語論に関する項目であることが目を引く。しかし、これは言語学史的に見るとやむを得ないところであろう。なぜなら、Franz Bopp がサンスクリットの動詞活用体系について比較言語学的考察を行なった1816年には未だ音韻対応の法則性という概念に到達しておらず、専ら形態論の対応が論じられている。Jakob Grimm がグリムの法則を発見するのが1822年である。そうして、A. Schleicher がかの有名な“Compendium…”ではじめて音韻対応の法則性を踏まえて印欧語の再建形を示したのが1861年のことであったからにはほかならない。

かくて、Wiedemann の説は1870年代以降になると活発に運動を開始したドイツ青年文法学派によって次第に批判にさらされてゆき、遂にはウラル=アルタイ語族という概念そのものまでもが疑問視されることとなってゆく。こうした時期に、ウラル=アルタイ語族説にとってはまさに最後の牙城ともいべきフランスの言語学者 Aurélien Sauvageot が輩出する。彼は、学位論文である Sauvageot (1930) において、ウラル=アルタイ祖語の語頭、語中に見える *k, *t, *p, *b および語中の *ŋ の変遷を諸言語にあたって跡づけ、214の比較語例を提出した。

当時のアルタイ言語学者たちの中でも、この Sauvageot に対する評価は2分されている。フィンランドのトルコ語学者 Räsänen (1949) をはじめとして、Winkler (1886) や Menges (1945) などは賛成派だったが、ロシアの Shirokogoroff (1931) やドイツの J. Benzing (1953) などはこれを批判した。そうして、これらは次第にウラル語族とアルタイ語族とに分かたれてゆき、ウラル=アルタイ語族説はゆるやかな終焉を迎えるのである。

しかしながら、日本では小倉進平博士などに甚大な影響を与え、例えば小倉進平 (1920:32) では、

国語及び朝鮮語は今後なお研究すべき点が多々あるであろうけれども、
畢竟（ひっきょう）ウラル・アルタイ語族の一員でなければならぬであ
ろう

とされている。

1.4.1.2. アルタイ語族説

本格的なアルタイ比較言語学を確立したのは、フィンランドの言語学者 G. J. Ramstedt である。彼は、ウラル諸語の研究からスタートしたが、1898年に生きたモンゴル語の方言音声資料を収集するため、現在のモンゴル国をはじめとしてヴォルガ河流域からアフガニスタンに至る広大な地域にフィールドワークを敢行した。フィンランド語を母語とし、大学ではハンガリー語を修め、チェレミス語を現地で習い、さらに上記フィールドワークをとおしてハルハ・モンゴル語とカルムック語を習得することによって、次第に彼の脳裏にはウラル・アルタイ語族説に対する強い疑惑が湧いてくる。

Ramstedt (1902) は、こうした経緯の中から搾り出されてきた最初の解答であった。すなわち、モンゴル語とトルコ語に見られる類似性は、古く両言語間で相互に行なわれた借用による結果の所産ではないかとする見解である。

しかし、その後の研究によって、

モンゴル諸語とチュルク諸語における $r // z, l // \dot{s}$

の対応をはじめとして、

モンゴル諸語の語頭 $n-, d-, \dot{z}-, y-$ //チュワツシ語の \dot{s} //トルコ諸語の $*y$
 トルコ諸語の語中 $-p-, -b-$ //モンゴル文語 γ ,
 トルコ諸語の語頭 ϕ (ゼロ)//モンゴル諸語 $-h$ //満州語 $-f$ //ゴルディ語 $-f$ //
 エウエンキーおよびラムート語 $-h$

など、次々と音韻対応を示す例が発見され、ついに Ramstedt (1916: 1) においては、モンゴル語、トルコ語、満州・トゥングース語は、ともに共通の「アルタイ祖語」から分岐発展したものであるとの確信を得るに至っている。

なお、彼の所説の集大成は、Ramstedt (1952), 同 (1957), 同 (1966) に結実しており、就中その形態論に関してはいまだこれに比肩するものがないほどの水準を示していると言われている。また、Poppe (1965: 143) では、Ramstedt に読み取れる系統説の概要が図 1-18 のようにまとめられている。

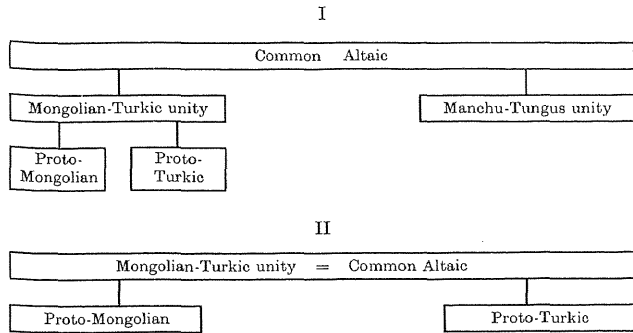


図 1-18 Ramstedt の系統説

Poppe (1965 : 143) より引用

Ramstedt に強く影響を受けた学者には、B. Ya. Vladimircov, Z. Gombocz, N. N. Poppe, K. Menges, N. A. Baskakov などがあったが、このうち B. Ya. Vladimircov は Владимирцов (1911), 同 (1929) などで、モンゴル諸語、チュルク諸語、満州・トゥングース諸語はともにアルタイ祖語から分岐発展したものと考え、図 1-19 に示すスキムによってアルタイ語族説を主張した。

すなわち、アルタイ共通祖語からまずはモンゴル・チュルク共通祖語が分岐し、さらにそれぞれがモンゴル共通祖語とチュルク共通祖語に分岐発展することによってもう一方のトゥングース共通祖語と並ぶ、という見取り図である。

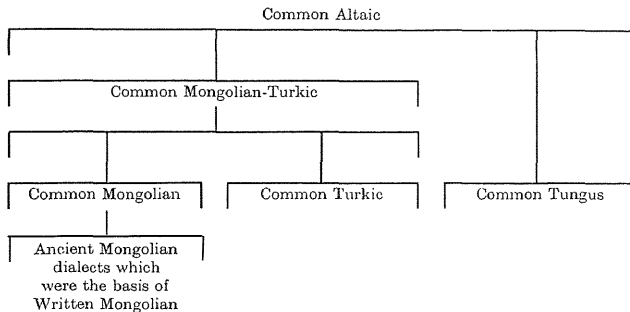


図 1-19 Владимирцов (1929) のスキム

その根拠は、特に蒙-土間にまとまった語彙の借用があるという事実を重く見ているためであり、この故に彼はモンゴル・チュルク共通祖語の分岐を着想したものと考えられる。

これに対して、Poppe (1965: 147) はアルタイ共通祖語から分岐したものを「チュワッシ、チュルク、モンゴル、満州・トゥングース共通祖語」と、「原朝鮮語」とにまとめる。次に、前者は「チュワッシ、チュルク共通祖語」と「モンゴル、満州・トゥングース共通祖語」に2分されているので、先に掲げた Vladimircov と比較するとモンゴル諸語の扱いが明瞭に異なる。

なお、Poppe 氏の主張するアルタイ語族説の全貌を図示すれば、図1-20 および図1-21のようになる。晩年の Ramstedt 同様、朝鮮語をアルタイ語族の一員として位置づけている点が目を引く。

“Khalkha Structure” の著作で知られる John C. Street も、先に挙げた二人と同様に、朝鮮語を含めてアルタイ語族説を唱えている。ただし、図1-22に

The same can be represented as a system of concentric circles:

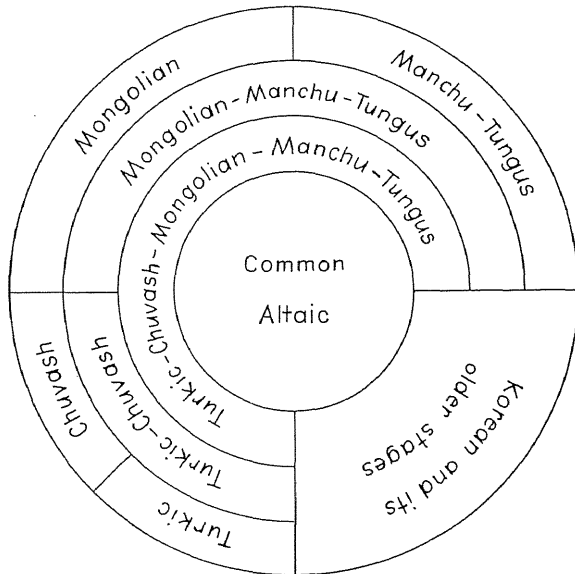


図1-20 Poppe のスキム

Poppe (1965: 146) より引用

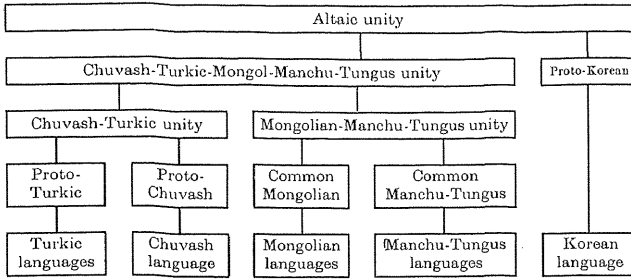


図 1-21 Poppe のスキム

Poppe (1965 : 147) より引用

示したように、これに日本語やアイヌ語までが疑問符付とはいえ加えられている点は、かなり大胆な仮説である。なお、彼の所説は Street (1962 : 95) に発表されている。

この態度をさらに敷衍したのが、かつてシカゴ大学に奉職していた Roy A. Miller である。彼は、Miller (1971) において中期朝鮮語、古代日本語、琉球

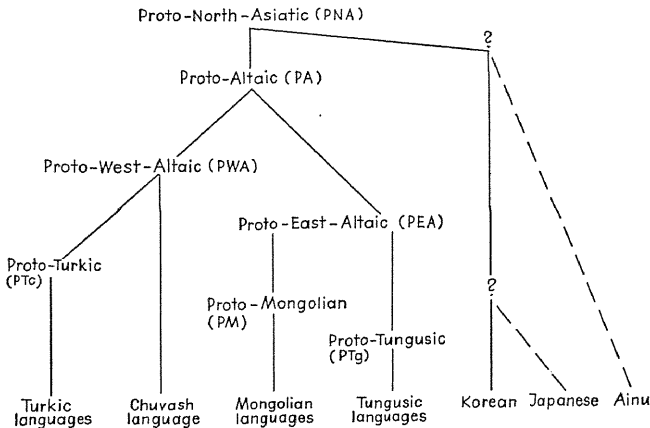
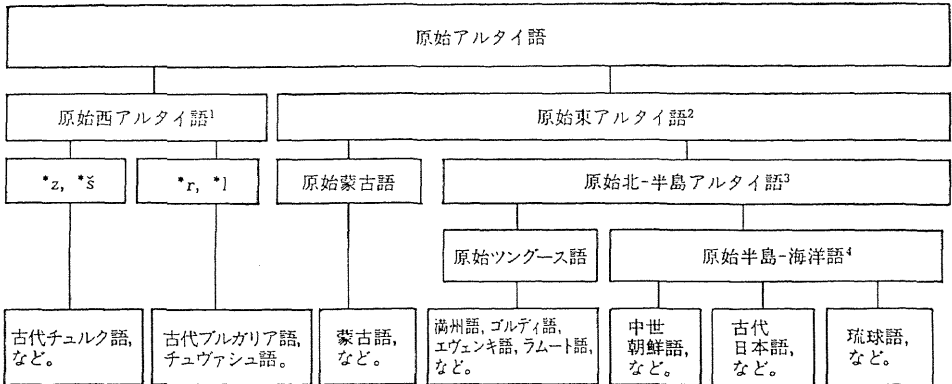


図 1-22 Street のスキム

Poppe (1965 : 147) より引用

語なども堂々とアルタイ語族の中に位置づけており、次に示す図1-23のようなスキムを掲げている。



¹原始チュルク語と同じ。

²原始蒙古語-ツングース語-朝鮮語-日本語と同じ。

³原始ツングース語-朝鮮語-日本語と同じ。

⁴原始朝鮮語-日本語と同じ。

図1-23 Millerのスキム

Millerの訳本(1981:51)より転載

1.4.1.3. アンチ・アルタイ語族説

Ramstedt とほぼ同じ時期に活躍した学者だが、ポーランドの Wł. Kotwicz は、Kotwicz (1953) など一連の著作を通して、これら諸言語間に見られる類似性は相互の接触と干渉による所産と解釈し得る部分が多いとして、親族関係を議論すべき段階にはないと主張している。なお、同様の見解はデンマークの K. Grønbech, ハンガリーの L. Ligeti などにも見られる。

一方、イギリスの Sir G. Clauson やドイツの G. Doerfer は、Clauson (1956), Doerfer (1963) などこれら諸言語間に見られるのは「借用関係」なのであって、親族関係に基づく所産ではないという、かなりラディカルな見解を示している。なお、ロシアの A. M. Щеп6ak 女史も同様の立場に立つ。

いわゆる比較言語学の観点からは、数詞や基礎語における共通性の欠損が「アルタイ語族」を唱えるにはいささか抵抗感を募らせると考えるのは至極当然のことであり、その意味では本稿の筆者もアンチ・アルタイ語族説に賛同する者の一人である。この機会に、ついでに敷衍しておけば、そもそも比較言語学という学問そのものが印欧諸語という、(1)文献に恵まれ、(2)文化的水準の落差か

ら階層的な地理的分布が明瞭に求められ、(3)適度な規模の地域にまとまっている、といった諸条件を満たすところに結果論として生じたものである以上、上の(1)から(3)を満たしていない他の言語にも同様の方法論が適用できるという保証は、極めて偶然的な場合を除けばかなり難しいものと思われる。

1.4.2. 類型論

こんにち言語類型論では、一般にチュルク諸語、モンゴル諸語、満州・トウングース諸語などに共通して見られる類型的特徴を捉えて、「アルタイ型 (Altaic type)」と呼んでいる。系統論的呪縛から解放されて、言語構造だけを虚心坦懐に対照する言語類型論の分類法に従えば、日本語、朝鮮(韓国)語はもちろんのこと、見方によってはチベット語、タミル語なども同じ「アルタイ型」という類型を共有することになる。そこで、以下にこれらの特徴を大きく(1)音韻、(2)文法、の2項目に分けて総論的な素描をする。なお、詳細は次章以降に展開される各論に譲ることとする。

1.4.2.1. 音韻

1.4.2.1.1. 母音調和

同一単語内において、配列される母音音素の種類に関する共起制限があり、男性母音、女性母音、中性母音などの名称によって分類される。あえて一般音声学的所見を述べれば、調音上は調音点同化を主体とする生理音声学的合理性によって、また聴覚情報処理上からは城生佰太郎(近刊)の第5章にデータを開示して論じてあるように、P300およびN400などの典型的な高次機能を反映する固有の脳波反応パターンから、脳内の情報探査と場面の想定およびミスマッチに対するそれぞれの合理性が窺知される。

ただし細部を眺めると、ほぼ完全な形で現在でも調和を保持している、いわば母音調和のお手本のようなトルコ語では第1音節だけが突出していると言い難い⁽¹⁾のに対し、モンゴル語では第1音節だけが圧倒的に卓立している。このことは、後者だけに短母音のみで構成される多音節語における第2音節以下で著しい弱化が起こることによって裏づけられる。

一方、周知のように朝鮮語にあっては中期朝鮮語以降母音調和は次第に衰退しており、現在ではオノマトベなどごく限られた例に化石化して残っているに過ぎない。さらに、日本語においては、上代語の時代にその兆候があったとされてはいるが、すでに完全な形での母音調和とは言い難く、無論現在ではその

痕跡すら認めることはかなり難しい。

従って、「同一の類型的特徴を有する」といった言語類型論上の分類には、質的な問題が常につきまとうという宿命的欠陥があることは、常に念頭においておく必要がある。

1.4.2.1.2. 子音に関する特徴

外来語を別にして、いわゆる固有語の場合は語頭に子音音素が2つ以上並ぶことはない。特に、トルコ語では最近まで外来語でさえこれを許さない傾向が顕著であることが知られており、例えばフランス語 *la station* (駅) からの借用語は語頭に母音 *i* を添加して *istasyon* に、アラビア語起源の *smar* は *Is-mar*⁽²⁾ (命令する) などと「鑄直し」をされていたものである。

さらに、*r*-ではじまる語がほとんどないという傾向性も見逃せない。この場合も、一般的には語頭に母音を添加することによって対処しており、例えば日本語では、古く「羅漢」を「アラカン」、「ロシア」を「オロシヤ」などとしていた。また、トゥングース諸語では「ロシア」を意味する《Русь, Россия, русский》などに、それぞれ *orus* (トヴァ語, アルタイ語, カライ語), *oris* (カザフ語, ハカス語, ノガイ語), *uris* (タタール語), *oros* (モンゴル語, 満州語文語) などの例が見られる⁽³⁾。

1.4.2.2. 文法

1.4.2.2.1. 形態論的特徴

古典的類型論による(1)屈折, (2)膠着, (3)孤立, (4)抱合, の4タイプによる分類では(2)に属するところから、アルタイ諸語における形態論は、印欧諸語などと比べると総じて複雑で奥行きがある。チョムスキーの出現以来、統語論が盛んになった反面、形態論は統語論の中に発展的に吸収されてしまった観があるが、ことアルタイ諸語に関する限り、形態論は基本的に文法の要であると思われる。

アルタイ諸語における「膠着性」とは、語幹に接辞が付加されることによって新に2次語幹が形成され、これにさらに接辞が添加されることによって3次語幹が形成される…といった特徴をさすもので、印欧諸語などに見られる屈折タイプのように母音交替や接辞の付加された形態が、文法体系全体の中で組織的なパラダイムを組み、性、数、格などの意味や機能を幾重にも担っているものとは本質的に異なる。このため、接辞の種類が膨大になり、それらの分類整

理が大きな課題となる。

一例として、モンゴル語の *duu* (声) という名詞語幹および *bari-* (つかむ) という動詞語幹からの派生の実態を次に示す。

<i>duu-</i> (声)	一次語幹
<i>duuda-</i> (呼ぶ)	動詞派生接辞 <i>da</i> を添加した二次語幹
<i>duudalza-</i> (度々呼ぶ)	<i>iterative</i> 派生接辞 <i>lza</i> を添加した三次語幹
<i>duudalzagda-</i> (度々呼ばれる)	受動態派生接辞 <i>gda</i> を添加した四次語幹
<i>bari-</i> (つかむ)	一次語幹
<i>barild-</i> (つかみ合う=相撲を取る)	相互態 <i>ld</i> を添加した二次語幹
<i>barilda-</i> (相撲)	名詞派生接辞 <i>aa</i> を添加した三次語幹
<i>barildaacji-</i> (相撲取り)	行為者を表わす <i>cji</i> を添加した四次語幹
<i>barildaacjid-</i> (相撲取りたち)	複数接辞 <i>d</i> を添加した五次語幹
<i>barildaacjidt</i> (相撲取りたちに)	与位格格語尾 <i>t</i> を添加

1.4.2.2.2. 文法範疇

人称と数、および中期モンゴル語だけに確認されている性が挙げられる。中期モンゴル語に見られた性の一致は、小澤重男博士によって指摘された事実で、具体的には過去を表わす形態素の *-bi* がこれに当る。ただし、厳密には小澤重男 (1979: 66-67) にも強調されているように若干複雑であり、(1)主語が女性でなくても目的語が女性るとき、(2)主語および目的語に女性に関する限定語が付加された際には、それらに対する述語動詞にも性の一致が見られる、などの細則をとまなう。

人称代名詞のパラダイムは、トゥングース諸語を除き、本来的には自称 (1人称) と対称 (2人称) による 2 人称体系で、単数と複数の別がある。従って、3 人称を必要とする際には指示代名詞がこれを代行する。ただし、胡日勒巴特爾 (フレルバートル1998) など最近の研究によれば、モンゴル語では13世紀成立の『元朝秘史』において、単数形態素 *in* と複数形態素 *an* が明瞭に対立していたという指摘がある。

さらに、1 人称には話し相手を含めない「除外形 (exclusive)」としての《*ba*》と、話し相手を含めた「包括形 (inclusive)」としての《*bida*》の別があり、今日でも、日本語ならば「あなたと 2 人で」というところを、

та бид хоёр /ta bid xojoɾ/
あなた われわれ 2人

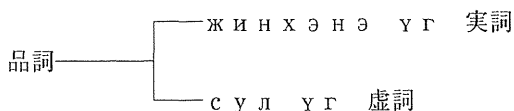
のように表現するという語用論的レベルに化石化して残されている。

1.4.2.2.3. 品詞間の連続性

言語類型論でしばしば問題にされてきた品詞間の連続性が顕著に見られる。例えば、モンゴル語の《сайн》は、

- (1) сайн ном 良い本
(2) сайн унш! 上手に読め!
(3) сайн нь үз! 良いものを見よ!

のように用いられるので、(1)では形容詞、(2)では副詞、(3)では名詞として機能していることになる。このような事実から、品詞分類の細目化が必ずしも常に有効であるとは限らないことに鑑みて、ネイティブの文法家にはこれらを統括して、



と、まずは大きく2分して、自立性のあるものを「実詞」、ないものを「虚詞」とするところから出発することが提案されている。

なお、実詞にはいわゆる名詞、形容詞、副詞および動詞が含まれるが、先にも述べたように接辞による派生関係が複雑にして豊かであるため、動詞と名詞の間もしばしば連続的な様相を呈することになる。ただし、前者が格曲用によって形態変化をするのに対し、後者が原則として活用語尾によってこれを行なうという点は決定的な相違である。

これに類似した現象を日本語から指摘すれば、大野晋 (1978: 87-88) など一連の著作で主張されているように、

- (1) 高い山
- (2) 高飛ぶ, 高光る (高いところで光る)
- (3) 面高 (植物名)

などを挙げるができる。

1.4.2.2.4. 動詞の活用

動詞活用語尾は、全体としてはかなり種類も多く、中には研究の行き届いていない部分を残しているとさえ言い得る。しかし、活用の種類は大別すると図1-24に示したように、(1)文を断止するか接続するか、(2)接続する場合は係りの相手が名詞類か動詞類か、の2類にまとめられる。

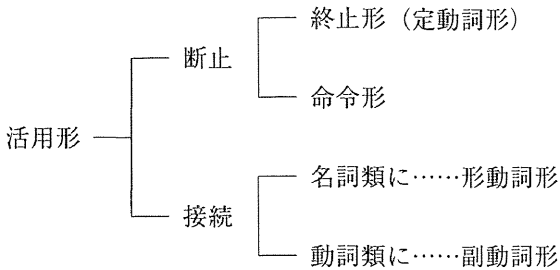


図1-24 動詞活用形

このため、例えば印欧諸語では発達している関係節や分詞(フランス語のジェロンディフなども含む)なども、これらの諸語では上記の「形動詞形」や「副動詞形」でまかなわれることになるので、アルタイ諸語においては「関係代名詞」や「ジェロンディフ」などというものは不要であるということになる。次に、このことをフランス語とモンゴル語によって例示する。

L' homme qui marche .
 人 [関係代名詞] 歩く

jabgaŋ xüŋ .
 歩く [形動詞] 人

Il s' en va en courant.

彼は 去った 走りながら [ジェロンディフ]

ter güüzj jabsaq.

彼は 走って [副動詞形] 行った

日本語における連用修飾機能を持つ「連用形」や、連体修飾機能を持つ「連体形」などは、いずれも上に述べた形動詞形と副動詞形に相当する。このことはまた、次項に述べる統語論的特徴とも深く関わっており、具体的には修飾語が被修飾語に先行することと密接不可分の現象である。この故に、アルタイ諸語はいわゆる syntagmatic な制約が強いタイプの言語とすることができる。

1.4.2.2.5. 統語論的特徴

まず第1に挙げるべきは、城生佰太郎(1989:219)にも指摘してあるように、無主語文の存在である。例えば、モンゴル語と日本語で対照すると、

namar bolob .

秋 なった

秋になった

odalgüi arbaṅ cag bolzjbain.

間もなく 10 時 になる

間もなく10時になります

などにはいずれも主語がなく、これを理論的に

[季節が] 秋になった

[時間が] 間もなく10時になります

などという怪しげな基底構造から派生されたなどと主張することは、まったくのナンセンスである。

第2に、原則として述部が文の末尾にすわっており、このため否定、推量、仮定、反実仮想…などが文尾まで聴かないとわからないという、音声情報処理上はいささか非効率な側面を露呈する。このため、多くのアルタイ諸語においては、城生佰太郎（1980）に指摘されているように結論を文頭に近い位置に繰り出したり、トルコ語に見られる「予告の副詞」を発明したりすることによってこれに対処している。

以下に、若干の例示をしておく。

- (1) goagcin emegen boscju ögürerun eke eke öter bos
 ゴアクチン おばあさんが 起きて 言うことには 母さん 母さんはやく 起きなさい
 gazjar derbelümüi töbüri' ün sonusdamui… (中略) …ge' bi.
 大地が 動いて 馬の蹄の音が 聞こえています と言った。
 (葉徳輝本『元朝秘史』巻二、第四十二帖)

- (2) baabgai xelexed, ajuultai cagt nöxöröö xajadag xün
 熊が 言うことには 危険な 時に 友人+自分のを 見捨てるような 人は
 muu nöxör bain .
 悪い 友人 です。
 (インソップ童話の翻訳より)

- (3) İnsallah üçünçü bir dünya harbi olmaz.
 願わくは 第三次 世界大戦が 起こらぬことを

- (4) Keşke bir arabam olsa.
 ~さえすればなあ 1台の 車が ある

(1)と(2)はモンゴル語からの用例で、述部動詞の先出し(下線部)が行なわれている。一方、(3)と(4)はトルコ語からの用例だが、下線を引いた「予告の副詞」の使用が目を引く。

最後に、統語論的類型のまとめとして、久野暉(1973: 6)に示されている英語の枝別れ図を参考にして筆者が城生佰太郎(1989: 217)に掲げた、印欧語タイプとアルタイ語タイプとの違いを図1-25に再録しておく。前者が「右翼」に枝を張った右枝別れ構文の特徴を示しているのに対し、後者は左へ左へ

と「左翼」に枝がシフトして行く様子が手に取るようにわかる。

(以下次号に続く)

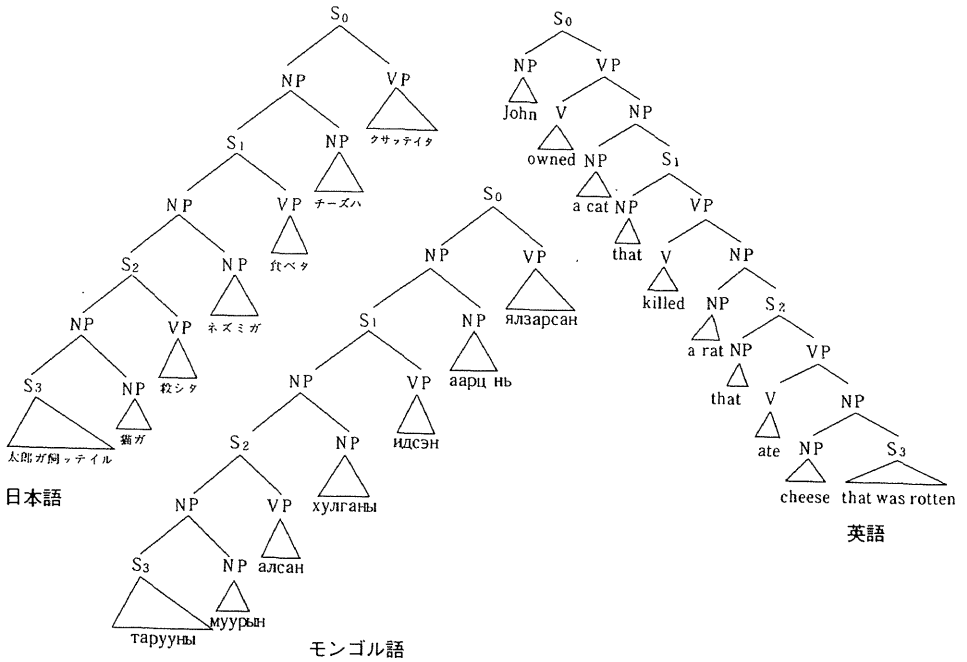


図 1-25 印欧型とアルタイ型の構文対照

城生 佰太郎 (1989: 217) より転載

【註】

- (1) 福盛貴弘氏からのご教示による。
- (2) トルコ語正書法では、i = [i], I = [ɯ] を示す。
- (3) 大江孝男 (1988) による。

【文献】

□和文文献

大江孝男 (1988) 「アルタイ諸言語」『言語学大辞典』第1巻, pp.528-545, 三省堂

大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』, 岩波新書

小倉進平 (1920) 『国語及朝鮮語のため』, 京城

- 小澤重男 (1979) 『中世蒙古語諸形態の研究』, 開明書院
 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店
 城生佰太郎 (1980) 「日本語の非能率的表現を考える —— 類型論的視点によるアプローチ」『東京学芸大学紀要』第31集, pp. 213-220, 東京学芸大学
 ——— (1989) 『日本人の日本語知らず』, 株式会社アルク
 ——— (1999-a) 「アルタイ諸語対照研究(1)」『文藝・言語研究 言語篇』第35号, pp. 1-30, 筑波大学文芸・言語学系
 ——— (1999-b) 「アルタイ諸語対照研究(2)」『文藝・言語研究 言語篇』第36号, pp. 35-49, 筑波大学文芸・言語学系
 ——— (近刊) 『アルタイ諸語対照研究 —— なぞなぞに見られる韻律節の構造』

□蒙文文献

胡日勒巴特尔 (フレルバートル, 1998) 『蒙古語言文化研究』, 内蒙古大学出版社

□欧文・露文文献

- Benzing, J. (1953): *Einführung in das Studium der altaischen Philologie und der Turkologie*, Wiesbaden.
 Владимирцов, Б. Я. (1911): “Турецкие элементы в монгольском языке”; *Записки Восточного Отделения Императорского Русского Археологического Общества* 20: 153-184, St. Petersburg.
 ——— (1929): *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика*, Ленинградский восточный институт имени А. С. Енукидзе, Ленинград.
 Castrén M. A. (1856): *Reiseberichte und Briefe aus den Jahren 1845 - 49*, St. Petersburg.
 Clauson, Sir Gerard (1956): “The case against The Altaic Theory”. *Central Asiatic Journal* 2: 181-187, The Hague, Wiesbaden.
 Doerfer, G. (1963): *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, Bd. I: *Mongolische Elemente im Neupersischen*, Wiesbaden.
 Kotwicz Wł. (1953): “Contribution aux études altaïques, A. Les termes concernant le service des relais postaux; B. Les titres princiers: turc bæg, mo. begi et ma. beile”. *Rocznik Orientalistyczny* 16: 327-368, Kraków.
 Menges, K. H. (1945): “Indo-European Influences on Altaic Languages”, *Word* 1: 2.
 Miller Roy A. (1971): *Japanese and Other Altaic Languages*. The University of Chicago press. 西田龍雄監訳『日本語とアルタイ諸語』, 大修館書店, 1981.
 Poppe, N. N. (1965): *Introduction to Altaic Linguistics*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
 Ramstedt G. J. (1902): *Über die Konjugation des Khalkha-Mongolischen*, Hel-

- sinki.
- (1916): “Ein anlautender stimmloser Labial in der mongolisch-türkischen Ursprache”, *Journal de la société Finno-Ougrienne*. 32 : 2, Helsinki.
- (1952): *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft II*, Formenlehre, Bearbeitet und herausgegeben von Pentti Aalto, *mémoires de la société Finno-Ougrienne*. 104 : 2, Helsinki.
- (1957): *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft I*, Lautlehre, Bearbeitet und herausgegeben von Pentti Aalto, *mémoires de la société Finno-Ougrienne*. 104 : 1, Helsinki.
- (1966): *Einführung in die altaische Sprachwissenschaft III*, Register, Bearbeitet und herausgegeben von Pentti Aalto, *mémoires de la société Finno-Ougrienne*. 104 : 3, Helsinki.
- Rask, Rasmus K. (1834): “Den skytiske Sproget”, *Samlede tilldels forhenutrykte Afhandlingene I*, København.
- Räsänen, M. (1949): *Zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen*, Helsinki
- Sauvageot, A. (1930): *Recherches sur le vocabulaire des langues ouralo-altaïque*, Paris.
- Schott, W. (1849): *Über das altaische oder finnisch-tatarische Sprachen geschlecht*, Berlin.
- (1853): *Das Zahlwort in der tschudischen Sprachenklasse, wie auch im Türkischen, Tungusischen und Mongolischen*, Berlin.
- (1860): *Altaische Studien oder Untersuchungen auf dem Gebiete der Altai-Sprachen*, Berlin.
- Shirokogoroff, S. M. (1931): *Ethnological and Linguistical Aspects of the Ural-Altaic Hypothesis*, Peiping.
- von Strahlenberg, Phillip Johann(1730): *Das nord-und östliche Theil von Europa und Asia, insoveit das gantze Russische Reich mit Sibirien und grossen Tatarei in sich begreiffet, etc.*, Stockholm.
- Street John C. (1962): Review of Poppe: [Vergleichende Grammatik der Altaischen Sprachen], *Language* 38 : 91-98.
- Wiedemann, J. F. (1838): *Über die früheren Sitze der tschudischen Völker und ihre Sprach verwandtschaft mit den Völkern Mitteleuropas*. Berlin.
- Winkler, H. (1886): *Das Uralaltaische und seine Gruppen*, Berlin.

【アルタイ諸語対照研究(1)訂正】

拙論, 城生(1999-a)のp.21下から2行めと1行めの「オスマン・トルコ」と「チャガタイ・チュルク」の順番が逆になっておりました。お詫びして、訂正させていただきます。